

## 別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

投映法の心理療法的バッテリーに関する研究  
ーロールシャッハ法と「穴」のある風景構成法の  
統合的活用ー

氏 名

高橋 昇

## 論 文 内 容 の 要 旨

**第1章**において本研究の問題と目的を述べた。心理アセスメントを行う場合に、テストバッテリーとしていくつかの種類の心理検査を組み合わせることはよく行われる。心理検査にはそれぞれ測定する範囲に相違があり、ロールシャッハ法（ロ・法と略）と風景構成法（LMTと略）にも違いがある。投映的な技法であるロ・法と、構成的な技法であるLMTは表現される世界も異なっていて、補完的に適用できると考えられる。従来のテストバッテリーは横断的にバッテリーを組んでいくが、筆者は LMT とロ・法の組み合わせにより、縦断的に心理療法過程全般にわたっての対象者に対する理解と治療的価値を高めようと考えた。両技法を心理検査から心理療法までの軸上に位置づけ、対象者に応じて、あるいは心理療法の時間経過の流れに沿って施行していくことが可能になると考え、それを含めた投映法の工夫と実践法を述べていく。それは最終的に「心理療法的バッテリー」という用語に集約される。

**第2章**において、ロ・法についての工夫として、名大式「思考・言語カテゴリー」を活用することによる付加価値を高めようとした。最初に解離性障害者 4 事例のロールシャッハ特徴を検討し、4 事例ともに思考・言語カテゴリーにチェックされたのは Fabulization Response と Arbitrary Thinking であった。Fabulization Response は個人的な感情を容易に表出しやすい人格を表すと考えられる。彼らは知性化や想像性は豊かだが、作話傾向が強くなり、自分独自の感情的世界に入り込む恐れがある。さらに Arbitrary Thinking も重なり、恣意的に思いこみで判断する傾向がそれらを強化すると考えられる。A、B、C の 3 事例にみられたのが、Abstraction and Card Impression の direct affective response、Defensive Attitude、Personal Response and Ego-Boundary Disturbance の中の personal experience である。彼らは情緒的刺激に敏感であり、Defensive Attitude では神経症的な防衛が働いていることを示した。しかし、同じ診断部類に入っている個別には特有の差異があることが示唆された。次に境界性パーソナリティ障害者への適用を試みたところ、1) Defensive Attitude、2) Fabulization

Response、3) Arbitrary Thinking が多出することが特徴と考えられ、これら三種の組み合わせが彼らの病態の在り方をよく示していることが明らかになった。次の節では境界性パーソナリティ障害事例を挙げ、思考・言語カテゴリーの特徴を検討した上で、心理療法中にそれらを“here and now”で取り上げることが有効な技法となることを例証した。

第3章においては、風景構成法についての工夫として、LMTに「穴」というItemを付け加えた「穴」のある風景構成法(LMT-Hole)を創案し、このItemがどのように表現されるか、どのような意味があるのかについて、「健常短大生」と神経症から境界例を含む「臨床群」に施行して比較検討した。そこには心の深層に通じる次のような意味があることが明らかになった。1) 想像性の刺激、2) 無意識への通路、3) 保護的空間、4) 上下のベクトル、5) 穴の大きさ、6) 葛藤の存在、7) 穴が描けない場合などがそれであり、異質の項目呈示によってさまざまな内的世界が表現されることがわかった。

第4章はLMT-Holeを臨床事例に用いて、その有用性を探った。まずLMT-Holeの意義を心理療法的なかわりをもったクライアントを通して例証するため、最初にうつ病と診断された女性の事例を挙げた。父親の虐待を受けた過去の想起と整理が必要なクライアントであり、ここではLMT-Holeの穴は過去と無意識への入り口としての意味とともに、心理療法における内界における深層の探索を示していることが明らかになった。次に父母との関係が問題になった摂食障害の女性事例を挙げ、心が発展して変化していく「可能性」としての穴の意義を検討した。さらに、簡単な言語は解するが、言葉による心理療法が困難なMR事例を挙げた。これはLMT-Holeと自由画を心理療法的に用いた事例であり、ここでは1) 描画自体がコミュニケーションツールとして機能すること、2) 彼女の在り方を如実に表していること、3) 三種の描画が心理療法的バッテリーとして意味があることを示した。投映法の心理療法的バッテリーは、必ずしもロ・法とLMT-Holeに限らず、クライアントの要因やセラピストクライアント関係によっても柔軟に変更がきく。

第5章では、臨床実践でのロ・法とLMT-Holeの心理療法の中での併用について、事例を挙げて意義を明らかにした。ここでは第2章で呈示した解離性障害の4事例において、同じ診断分類にあっても個々の内的な様相には相違があることを受け、内的な世界の相違が大きい2事例について個別に詳説した。

はじめに子どもを虐待してしまうという主訴を持つ女性事例を挙げ、ロ・法でアセスメントをしたが、LMT-Holeでは転移関係の中でのその時々状況が示され、セラピストはそれを理解しつつ心理療法を進めることが肝要であることを示した。

次に失声で来院した解離性同一性障害の女性事例を挙げ、その多重人格の障害はロ・法上明らかではなく、LMT-Hole 上で交代人格が明確になり、その表明がクライエントの全体像を理解する上で重要であった。ロ・法では彼女の内的な“苦”の世界がみてとれ、LMT-Hole との関連がうかがわれた。そしてセラピストがクライエントのロ・法と LMT-Hole の結果から、「心の物語」を読むことが心理療法のストーリーを紡いでいく縁となることを示した。

さらに、変化の乏しい男性の慢性化した精神科クライエントとのかかわりを挙げた。彼のロ・法は内容は貧困で、変化と情緒に乏しい紋切り型のプロトコールであった。描画では変化する面と常同的で変化しない面が併存し、ロ・法では不明確な部分が LMT-Hole では表現され、並行して行った相互スクリブル法もポジティブな転移と逆転移を醸成する舞台として機能した。

第6章では、ロールシャッハ法と LMT-Hole の「心理療法的バッテリー」について述べ、1) かかわりのためのアセスメント、2) 継続的なアセスメント、3) セラピストの逆転移と技法の工夫、などの面から考察した。二つの技法はクライエントに応じた能力やチャンネルに合わせて使用することが可能である。面接での言語表現、ロ・法への投映、LMT-Hole の描画が対象者により、また“時”によって重心を移動することになり、それらの重要度はシフトする。これが心理療法的という所以でもある。

そして、ロ・法上では変化がなくとも、心の動きやクライエントのメッセージは存在し、LMT-Hole はそれを把握することに意義を持つ。両技法の導入時期はクライエントとの関係の中に存在することが明らかになり、外的な事象と内的な事象が交差して「自然にやれる時」が導入時期となる。

投映的技法であるロ・法と構成的技法である LMT-Hole との差は、対象者の反応性・表現性によって表れるものには相違がみられる。よって、ロ・法と LMT-Hole の関連と相補性について、1) 刺激特性の相違、2) 対称性と相補性の観点から述べ、パラディグマティックな選択を要求するロ・法とシンタグマティックな選択が求められる LMT-Hole が、時間経過の中で複雑な入れ子構造をなしていることを示した。両技法をうまく活用していくことが心理療法に有効であることを述べた。

第7章で総括を行った。クライエントの全体像をロ・法で把握し、セラピストがそれを継続的に把持することが大事であり、LMT-Hole では「穴」Item に転移と心理療法経過を含んだありさまが投映され、その時々課題を把握できることが利点である。そして、両技法を経時的に組み合わせて実施し、その中に心理療法が含まれているという観点から「心理療法的バッテリー」という用語を提唱した。